

南東アナトリア先土器新石器時代の丘上遺跡 —ハルベトスワン・テペシ遺跡の第4次調査(2025年)—

下釜 和也 千葉工業大学地球学研究センター 研究員
ウルダー、ジェラール シャンルウルファ博物館 館長
森脇 涼太 千葉工業大学地球学研究センター 研究員
多田 賢弘 千葉工業大学地球学研究センター 研究員
佐竹 渉 千葉工業大学地球学研究センター 研究員
キュチュクアルスラン、ヌルジャン 千葉工業大学地球学研究センター 研究員
鈴木 健太 早稲田大学教育・総合科学学術院 助教
新井 才二 東京大学人文社会系研究科 助教
宮井しづか 東京大学人文社会系研究科 博士課程
西秋 良宏 東京大学総合研究博物館 教授

Exploring a Pre-Pottery Neolithic Hill-top Site: The 2025 Investigations at Harbetsuvan Tepesi, Southeastern Anatolia, Türkiye

SHIMOGAMA, Kazuya Associate Researcher, Institute for Geo-Cosmology, Chiba Institute of Technology
ULUDAĞ, Celal Director, Şanlıurfa Museum
MORIWAKI, Ryota Associate Researcher, Institute for Geo-Cosmology, Chiba Institute of Technology
TADA, Toshihiro Associate Researcher, Institute for Geo-Cosmology, Chiba Institute of Technology
SATAKE, Wataru Associate Researcher, Institute for Geo-Cosmology, Chiba Institute of Technology
KÜÇÜKARSLAN, Nurcan Associate Researcher, Institute for Geo-Cosmology, Chiba Institute of Technology
SUZUKI, Kenta Assistant Professor, Faculty of Education and Integrated Arts and Sciences, Waseda University
ARAI, Saiji Research Associate, Graduate School of Humanities and Sociology, the University of Tokyo
MIYAI, Shizuka PhD student, Graduate School of Humanities and Sociology, the University of Tokyo
NISHIAKI, Yoshihiro Professor, University Museum, the University of Tokyo

1. はじめに

ハルベトスワン・テペシ遺跡(以下、ハルベトスワンと略)における発掘調査と研究は、千葉工業大学地球学研究センター、東京大学、シャンルウルファ考古学博物館の共同調査として2022年に始まった(松井ほか2023;西秋ほか2024;下釜ほか2025)。完新世初頭にあたる初期新石器時代、定住化、農耕牧畜の開始、そして巨石建造物に代表される技術革新が南東アナトリアでどのようにして起こったのか、考古学と地球科学の観点から解明することを私たちのチームは目的としている。そもそも20世紀末にいたるまで、調査地シャンルウルファ県内の新石器時代遺跡はほとんど知られていなかった。その状況を大きく変えたのが、1995年に発掘調査が始まったギョベックリ・テペ(Göbekli Tepe)遺跡である。後に世界文化遺産に登録されたギョベックリ・テペ遺跡は、巨石建造物を複数基有する祭祀集落が営まれ、特異な狩猟採集民文化が栄えたことを明らかにした(Schmidt 2006)。その後、

ギョベックリ・テペ周辺に10箇所以上の新石器時代遺跡が発見され、ギョベックリ・テペ遺跡が唯一の特殊な祭祀集落ではなかったことがわかってきた。それにともない、イスタンブール大学のネジュミ・カルル教授を中心としてトルコ共和国が主宰するタシュ・テペレル・プロジェクトの下、カラハンテペ(Karahantepe)やチャクマックテペ(Çakmaktepe;三宅ほか2025)、私たちが調査するハルベトスワンなどを含む8箇所の遺跡で調査研究が続けられている(Karul et al. 2025)。

2. これまでの調査の経緯と成果

前年度までのハルベトスワンにおける発掘調査では、この遺跡の居住堆積が第1層(新)から第3層(古)まで3つの建築層からなることを突き止めていた(西秋ほか2024)。前年にはそのうち最下層にあたる第3層の円形遺構を発掘し、第2層と第1層の矩形遺構への建築プランの変化を初めて層位的に確認することができた(下釜ほか2025)。また、第2層では床下に二次埋

葬された人骨群を発見した。この第2層は放射性炭素年代測定の結果、約10600～10300年前(およそ紀元前8600～8300年)という較正年代値が得られており、先土器新石器時代B前期に相当することが判明した(下釜ほか2024)。この年代はサイブルチュ遺跡(Sayburç)やセフェルテペ遺跡(Sefertepe)ともほぼ符合する。セフェルテペはハルベトスワンと同じく矩形建築からなる集落で、一方、サイブルチュは不定形の石柱遺構群が密集した単一時期の集落址とされている。つまり、同時代のタシュ・テペレル遺跡群のなかでも、遺跡の規模や建築遺構の形態や技術、石柱装飾や彫刻などの物質文化の組成にかなりの差異があることが理解されるようになってきた。

また、最上層の第1層では3本の石柱をとまなう半地下式の矩形遺構を確認した。ハルベトスワンでは2017年から2019年にかけてのトルコ隊による緊急発掘ですでに石柱遺構が発見されていたが、同じ層位で、つまり同時に複数の石柱遺構が存在することを確かめることができた。矩形の石柱遺構が同時併存することは、サイブルチュほかのウルフア新石器時代遺跡でも確認されていて、石柱をもつ建造物がそれほど特殊ではなかったことを物語っている。

ハルベトスワンの第4次調査は、前年とほぼ同じ季節の9月上旬から10月上旬にかけて約1ヶ月間、発掘調査と出土資料の分析を実施した。今回の発掘調査では、これまで調査してきた調査区に隣接する2箇所の発掘区(D6a区とD6b区)を新たに設け、第1層の遺構群の分布状況を面的に理解することを主な目的とした(図1)。また、2024年に確認した石柱遺構において空間利用のあり方を調べるため、床面堆積の精査による遺物サンプリングをおこなったほか、各層の埋没



図1 ハルベトスワン・テペシ遺跡の発掘区。2025年は北側の2つの発掘区D6aとD6bを主に調査した。

過程の解明に向けて発掘区セクションで土層堆積の観察も手がけた。本発表では以下、遺構の発掘に焦点を絞って報告する。

3. ハルベトスワン第1層遺構群の発掘

これまでの発掘区と同じく、表土を除去すると地表下10～20cmで石壁が姿を現し始めた(図2)。D6a区(発掘範囲4m×5m)では、扁平な石灰岩の大礫を積んだ、厚さ1～1.5mに及ぶ大壁を検出した(図3)。D6a区南側ではこの大壁に直交するかたちで、南側に厚さ40cmほどの石壁が続き、半地下式の矩形遺構の部屋を2つ確認できた。これらは2022年に確認していたD6c区の遺構の延長部分である。部屋のなかの堆積物は、壁から崩落したとみられる大小の礫群が乱雑に詰まった上層と、礫群を多く含まない下位の土層からなっていた。下位の土層からは、多数の磨製石器(磨り石類)、大型のフリント石核、濃緑色軟玉製の大型ビーズなどが散在した状態で出土した。こうした遺物はすぐ上の礫層からは出土することはないので、下位の土層は新石器時代当時の床面に相当するものと考えてよいだろう。しかしながら、これまでに調査し



図2 発掘風景。中央手前のD6a区に第1層の矩形遺構の上面が見える。南東を望む。

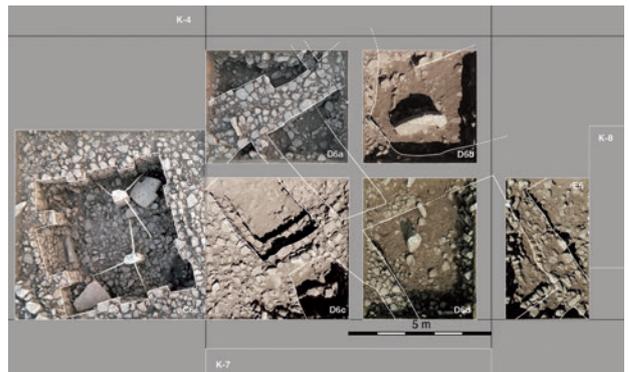


図3 第1層の遺構群。



図4 D6b区の不定形遺構。黄色の点線は石壁のラインを示す。

てきた多くの矩形遺構と同様、ここでは石灰漆喰床のような床面を見出すことはできなかった。なお、この遺跡で言う磨製石器とは、いわゆる磨り石類である。研磨して製作した石斧や石鑿などは含まれていない。

D6a区の北側では、南側の二部屋とは異なって、床面上の遺物と思われるものは出土しなかったが、大礫を敷き詰めた敷石床を確認した。南側の床面土層とほぼ同じ高さにあることから判断して、この敷石床は第1層のものと考えられる。ただし、これが屋外にあたるのかどうかはよく分からない。D6a区の北西にはトルコ隊が掘ったK-4区があるが、ここで検出された遺構の形状は不規則で、今回の遺構とはうまくつながらないようだ。

D6a区の東に隣接するD6b区(発掘範囲4m×4m)で出土したのは、これまでに調査してきた矩形遺構とは似ても似つかない不定形の半地下式遺構であった(図4)。調査区北端に直線に走る石壁は、他の調査区の矩形遺構と同じ方向をもっていたが、発掘した西側と南側の石壁は内外に湾曲したつくりをしていて、直角の角をもたないものであった。遺構内ではあちこちで磨製石器類が複数出土したほか、ギョバックリ・テペで確認されているものと類似する石盤の破片がハルベトスワンでも初めて出土した。興味深いのは、D6b区内の離れた地点で出土した磨製石器片が接合したことである。隣接するD6a区の部屋と同じように、これらの磨製石器類は床面の上に放置、あるいは廃棄された状態のままで、遺構が埋没したのと考えられる。



図5 遺構内に半ば埋没した状態で出土したT字型石柱。

遺物の出土状況からみて、こうした遺構は基本的には住居として利用されたものであろう。この遺構の部屋でもやはり石灰漆喰床などの立派な床面はみつからなかった。

もう1点、D6b区で注目されるのは、地表面にも露出していたT字型石柱である(図5)。頂部のT字部分が少し欠損するが、高さ183cm、幅53cm、厚さ23cmの石柱で、小端面にV字状の浮彫と、縦の掘り込み、それに指の浮彫表現が施されていた。幅広の側面には腕の表現はみられなかった。この石柱は不定形遺構の床面直上ではなく、40cm以上の礫土層の上にかぶさる形で出土した。このことは石柱が遺構が埋没する途中で廃棄されたことを示す。

4. ハルベトスワン第2層遺構群の発掘

今回の調査では、時間の都合もあって第2層の遺構を完掘するまでには至らなかった。ただし、第1層の部屋内部で床面を精査する過程で、第2層に属すると思われる遺構を一部で確認することができた。

D6a区では、磨製石器群が出土した部屋の中で、第1層床面直下から同じ軸方向をもつ別の石壁がみつかった。さらに、この壁に続くもう一つ別の壁が大壁に沿って検出され、第2層の遺構の上面に到達したものと判断した。

D6b区では不定形遺構の床下にあたる部分から、第2層の矩形遺構の一部を確認できた(図6)。幅1mに満たない小部屋をもつ複室遺構とみられ、これまでにハルベトスワンで確認された遺構とは異なるプランをもつ可能性もある。壁の一部には扶壁のような突出部も確認された。さらに、石壁に埋め込まれるように据えた石柱状の立石に、人の腕か動物の脚を浮彫彫刻した表現を確認した(図7)。第1層の不定形遺構内に



図6 D6b区の不定形遺構下から検出した第2層遺構の一部。



図7 第2層遺構の壁に埋め込まれた石柱状の立石。浅浮彫部分を白線で示す。

埋没したT字型石柱とともに、ハルベトスワンでは稀な彫刻装飾として大変目立つ発見だが、こうした表現はギョベックリ・テペ遺跡やカラハンテペ遺跡のそれに比べると質量ともに大きな違いがあることに変わりはない。

今年度は第2層の一部を確認しただけであったが、ハルベトスワンの遺構群は私たちがこれまで想定していた以上に複雑な構造をしていた可能性が出てきた。詳細は今後の調査に期待したい。

5. ウルファ最大級の初期新石器時代遺跡 アヤンラル・ホユックの発掘へ

2025年はハルベトスワン調査中、発掘調査そのものとは別に大きなイベントがあった。

三笠宮彬子女王殿下、トルコ共和国文化観光大臣、

千葉工業大学の理事長や学長、中近東文化センター附属アナトリア考古学研究所の松村公仁所長をはじめとして、現地行政関係者らの参列の下、9月19日、アヤンラル・ホユック遺跡(Ayanlar Höyük)にて鍬入れ式が開催された。2013年に発見されたこの遺跡は推定規模が10ha以上で、ギョベックリ・テペとカラハンテペ遺跡に匹敵するシャンルウルファ県のなかでも最大級の新石器時代遺跡である(Çelik 2017)。地表面で採集された遺物によれば、初期新石器時代の打製石器や磨製石器のほか、ヒョウ形彫刻や線刻石製容器などが含まれ、ハルベトスワンと同時かそれより古い段階にさかのぼる可能性がある。初期新石器時代の大規模集落の形成とその発展過程を追究するには絶好の遺跡である。正式な調査許可が下り次第、私たちの調査チームで来夏から発掘調査を本格的に手がける予定で、タシュ・テペレル遺跡群の全体像を明らかにする上で極めて重要な貢献をもたらすことと大きな期待を寄せている。

今年度の現地調査は、千葉工業大学地球学研究センターの研究費のほか、日本学術振興会科学研究費補助金・特別推進研究(24H00001、代表：西秋良宏)、同・基盤研究(B)(25H00527)を受けて実施した。調査の実施にあたって、中近東文化センター附属アナトリア考古学研究所の故・大村幸弘前所長や松村公仁所長、師田清子氏、そしてハルベトスワン・テペシ遺跡の所在するエイユビエ郡庁など現地の関係者諸氏から多大なご支援とご協力を賜った。特に、イスタンブール大学のネジュミ・カルル教授、シャンルウルファ文化遺産保護局のラマザン・バイラン局長、シャンルウルファ博物館のムヒッティン・チチェック副館長、査察官のオウズハン・ユルドゥルム氏、ハラン大学のメフメト・オナル教授、そして発掘調査に参加したハラン大学などの卒業生ら、現地調査滞在中には多くの機関および個人にご協力をいただいた。末筆ながら記して感謝申し上げます。

■参考文献

- ・ Çelik, B. 2017 A New Pre-Pottery Neolithic Site in Southeastern Turkey: Ayanlar Höyük (Gre Hut). *Documenta Praehistorica* XLIV: 360-367.
- ・ Karul, N. et al. 2025 Şanlıurfa Neolitik Çağ Araştırmaları Projesi - Taş Tepeler: Son Çalışmalar, Yeni Sonuçlar. In A. Engin, K. Özçelik, Ş. S. Çokay Kepçe, V. M. Tekinalp, F. Yıldırım, and M. Özturan (eds.), *Geleceğe Miras: Türkiye Arkeolojisinin Altın Çağı*, cilt 1, 55-88. Ankara, T.C. Kültür ve Turizm Bakanlığı.

Kültür Varlıkları ve Müzeler Genel Müdürlüğü.

- ・ Schmidt, K. 2006 *Sie bauten die ersten Tempel: Das rätselhafte Heiligtum der Steinzeitjäger*. München, Verlag C.H. Beck.
- ・ 下釜和也・鈴木健太・池山史華・C. ウルダー・西秋良宏 2024 「南東アナトリア先土器時代の新石器時代、ハルベトスワン・テベシ遺跡の年代と編年」第29回日本西アジア考古学会大会での口頭発表、南山大学。
- ・ 下釜和也・C. ウルダー・森脇涼太・多田賢弘・N. キュチュクアルスラン・新井才二・西秋良宏 2025 「南東アナトリア先土器新石器時代の丘上遺跡—ハルベトスワン・テベシ遺跡の第3次調査(2024年)」『第32回西アジア発掘調査報告会報告集』18-21頁 日本西アジア考古学会。
- ・ 西秋良宏・C. ウルダー・下釜和也・森脇涼太・多田賢弘・佐竹渉・鈴木健太・N. キュチュクアルスラン・新井才二・池山史華 2024 「南東アナトリア先土器新石器時代の丘上遺跡—ハルベトスワン・テベシ遺跡の第2次調査(2023年)」『第31回西アジア発掘調査報告会報告集』18-21頁 日本西アジア考古学会。
- ・ 松井孝典・西秋良宏・下釜和也・C. ウルダー・森脇涼太・多田賢弘・鈴木健太・新井才二 2023 「南東アナトリア先土器新石器時代の丘上遺跡—ハルベトスワン・テベシ遺跡の第一次調査(2022年)」『第30回西アジア発掘調査報告会報告集』9-13頁 日本西アジア考古学会。
- ・ 三宅裕・板橋悠・石田温美・F. シャーヒン 2025 「石灰岩の丘の暮らした狩猟採集民—トルコ、チャクマックテベ遺跡第4次調査(2024年)—」『第32回西アジア発掘調査報告会報告集』14-17頁 日本西アジア考古学会。